

○不登校による弊害と児童・生徒指導との関連

(1) 不登校による弊害

○ 学校は、集団活動を通して児童生徒の健全な発達を援助し、児童生徒が現在及び将来において、「自立した『生きる力』」を身につける場（下図参照）である。

そのため、不登校により学校での教育を受けないことによって、次のような弊害が生じると考えられる。

- ・社会性の基となる「人とのかかわっていく力」が身につけにくい。
- ・集団活動や体験活動を通して身につくような自己存在感、自己有用感、責任感が希薄化する。
- ・基礎的な学力の不足や体力の低下につながる場合が多い。
- ・生活のリズムの乱れから、基本的な生活習慣が身につかないことがある。
- ・長期化すると自己否定的な考え方が強まったり、「引きこもり」につながったりする可能性が高くなる。

(2) 児童・生徒指導との関連

下図は、児童・生徒指導のイメージ図であり、児童・生徒指導の意義を表したものである。不登校を未然に防止することは、本来の児童・生徒指導を推進することと密接な関係があり、そして、その基本として、栃木県では「学業指導の充実」を推進しているところである。“集団の中で学ぶ”という学校教育の特質を生かして、子どもたち一人一人を成長させる視点に立って指導していくことが必要である。

